

Abe Shigeo



阿部重夫が読む

「ブラック・スワン降臨」

手嶋龍一著

その日、あなたはどこにいたか。

「9・11」に私は東京・広尾にいた。英国紙の東京支局長宅のパーティーで、ベランダで知人とワインを飲んでいたら、夏の名残の夜風。ベランダから中国大使館を一望できた。

外交官の携帯が鳴った。やがてジャーナリストや金融関係者の携帯が、次々に鳴りだす。櫛の歯が抜けるように、客があたふたと消えていく。真っ暗だった中国大使館の建物の明かりがぼつんと灯り、みるみる明るい窓が広がった。

だれかがリビングの大型テレビをつけた。その残像が網膜に焼きつき、いまでも去らない。それから10年。今度はビンラディンの隠れ家に、黒いヘリ「ブラック・ホーク改良型」が舞い降りた。その闇夜の急襲は、どこにも映像が流れなかった。手嶋氏はそこに「ブラック・スワン」を重ねあわせた。この世には想定外のことがありうるという「リーマン・ショック」を予見したかのような懐疑論者のレバノン系米国人が書いたベストセラーのタイトルである。

ちょっと数学や統計をかじった人間なら、ベルカーブ（ガウス分布）が万能でない（たとえばロンゲテール・ベキ分布）ことは常識だが、10カ国語が読める博識

◇あべ・しげお 1948年東京生まれ。月刊誌「ファクタ」発行編集人。日本経済新聞記者などを経て現職。

インテリジェンスの不在 露呈

の元オプシオン取引トレーダーの手にかかると、世の人々が陥る謬見（フアラシー）がたちまち透けて見えてくるから不思議だ。

でも、手嶋氏の「ブラック・スワン」が舞い降りるのは、制御困難な市場ではない。国家が意思を発現する決断の場である。ビンラディンの隠れ家があるアポタバード襲撃は、10年かけてアルカイダを追跡してきたアメリカのインテリジェンス（諜報）の総決算だった。



新潮社・1575円

兵器を追い、国連や英、仏、独、伊など欧州インテリジェンスの一端やクルド人亡命者とも接触しただけに、身につまされるくだけた。

しかし、手嶋氏の筆鋒はそれだけで収まらない。アメリカのフアラシーを判断する自前の情報を持たない「インテリジェンス不在」の同盟国日本に及ぶ。

Think the Unthinkable（考えられないことを考えよ）。それがインテリジェンスの大原則である。その思考がどうから存在しない日本の権力中枢がみごとに機能不全を露呈したのが、「3・11」の大震災と福島第1原発の炉心溶融事故であった。

福島の空に舞った政府専用ヘリ「スーパー・ビューム」と、陸上自衛隊ヘリ「チヌーク」2機。前者は海水注入を遂巡した菅直人前総理が原発視察のパフォーマンスに搭乗し、後者は空から原子炉に海水を散布した哀しき「特攻」作戦の主役である。

そこにも「ブラック・スワン」は舞い降りた。だが、責任回避の口実にされたにすぎない。アメリカと対照的に、安逸を貪って政府を空洞化させた日本は、福島の山河を除染不能の廃墟にするという前例のない代償を支払おうとしている。

その明暗を手嶋氏ほど巧みに描いたノンフィクションはまだない。

理由はインテリジェンスのフアラシーにあった。

情報源のイラク亡命者「カーブボール」の大風呂敷にまんまと乗せられた顛末は、私も90年代後半にイラクの大量破壊

◇てしま・りゅういち 外交ジャーナリスト、作家。NHKワシントン支局長として9・11事件を中継。著書に「ウルトラ・ダラー」など。